

# 「蕭和尚靈塔銘」の碑文について

——王維・王縉兄弟との交流を物語る石刻資料の復元

内田 誠 一

## 一 はじめに

高山の古刹・嵩嶽寺に残る石刻「蕭和尚靈塔銘」は、盛唐の詩人・王維と交流のあった蕭和尚と乗如禪師の靈を供養する塔銘である。そこには『大宋高僧傳』の乗如傳に見えない事績が記されており、禪師に関する第一級の傳記資料であると言えよう。また、石刻の碑側には、王維の「乗如禪師・蕭居士を高丘の蘭若に過る」という詩と、別の詩人の和詩が刻されている。唐代の金石に唐詩が刻されている例は珍しく、稀少な文物であると言えよう。ただ、残念なことに、靈塔自体は現存せず、この石刻も断裂して上半分ほどが現存する「殘碑」「半截碑」である。本稿では、實地調査を基に、文献上から亡失した下截部分を検索して復元を試み、あわせて本文の内容について考察したい。

## 二 塔銘の残る嵩嶽寺と塔銘の概要

嵩嶽寺は高山太室南麓に残る寺で、もともと北魏の宣武帝の離宮であった。『河南通志』巻五十の「嵩嶽寺」の條には次のようである。

「蕭和尚靈塔銘」の碑文について

在登封縣城西北、高山之前。魏宣武帝創興。明帝正光間、榜曰閨居寺。隋開皇五年、改題嵩嶽寺。唐興重爲修復。武則天幸高山、常以此爲行宮、送鎮國金佛貯焉。

（登封縣城の西北、高山の前に在り。魏の宣武帝 創興す。明帝の正光間に、榜して閨居寺と曰ふ。隋の開皇五年、題を嵩嶽寺に改む。唐興るや重ねて修復を爲す。武則天 高山に幸するに、常に此を以て行宮と爲し、鎮國金佛を送りて焉に貯む。）

嵩嶽寺は、中國最古の磚塔とされる十五層塔で有名である。境内には、王維の弟王縉が撰文し徐浩が書丹した「唐敬愛寺大證禪師碑」（大曆四年）や、「佛頂尊勝陀羅尼經幢」（無記年）などが残る。付近には法王寺・嵩陽書院や乗如が居した會善寺などの舊跡が現存する。

次に塔銘の概要について述べる。石刻の法量は縦が七七糎、横が六〇・五糎、寛（厚み）が一四・五糎。圓首の碑形をとり、碑陽は、上部に三行・行二字で「蕭和尚靈塔銘」と篆額が刻され、その下方には正書で十五行（空行一行を含む）にわたって刻されている。行二字から十一字を残すのみ。本文の字徑は三糎強。摩滅が顯著であり、本文の右半分ほどが全體的に擦れて白っぽく見え、第六、第八行の下方は、

現在すっかり摩滅している。<sup>①</sup>一方碑陰は、上部に四行・行四字で「皇唐兩京故臨壇大德乘如和尚碑陰記」と隸額が刻され、その下方に、正書で二十一行（空行一行を含む）にわたって刻されている。本文の字徑は二糲弱。また、左右の碑側には正書で詩が刻されている。左右とも字徑は二糲強。右に王維の詩。詩題が二行、詩の本文が三行。いずれも行六字から十字を残すのみ。碑の右側面ゆえ、手前から奥へと読み進めるように、左行で刻されている。一方、左の碑側にはこの王維の詩に對する和詩が刻され、詩題が一行、詩の本文が二行。いずれも行六字から八字を残すのみ。作者は不明で、『全唐詩』『全唐詩補編』には収載されていない。

### 三 塔銘の著録情況

「蕭和尚靈塔銘」については北宋・趙明誠の『金石錄』卷八に見えるが、「唐蕭和尚靈塔銘 正書 姓名殘缺 德宗建中元年二月」と目のみであり、碑文については著録されていない。陳思『寶刻叢刊』卷二にも「蕭和尚靈塔銘」の條が見えるが、『金石錄』の記載をそのまま引用しているにすぎない。その他、この塔銘について概説した文献はあるが、碑文を著録した文献は無いように思われた。ところが、陳尚君編『全唐文補編』が二〇〇五年九月に上梓され、同書を十一月に入手するに至り、その「全唐文又再補卷一〇 闕名」に「蕭和尚靈塔銘」の碑陽と碑陰が著録されていることを知った。その本文は、『八瓊室金石補正續編』卷三二によるものと注記されている。

陸增祥の『八瓊室金石補正』一百三十卷は、王昶の『金石萃編』以後の金石學の名著としてよく知られているが、陸增祥の次子である陸繼輝の撰になる『八瓊室金石補正續編』六十四卷は、六十六冊の稿本

（現・上海圖書館藏）として傳存していたため、殆ど知られることがなかった。幸いなことに、同本は『續修四庫全書』（上海古籍出版、一九九五年）の史部・金石類に收められており（塔銘本文は同書九〇〇冊一四四頁に收載）、本稿における本文補訂に用いることができた。陸繼輝は良拓から翻字したものと見えて、現在の碑面では漫漶となつてゐる文字やすっかり摩滅してゐる文字も、相當數翻字されている。ただ、いずれの資料に於ても、上下に斷裂した後の上截部分についてのみ著録ないし概説したものにすぎず、その本文の全體像は明らかでないという憾みが残る。

### 四 塔銘の本文について

『八瓊室金石補正續編』に著録される「蕭和尚靈塔銘」本文中において、「□」（闕字や判讀不能な文字を表す記號）に作つてゐるにもかかわらず、現在の碑面から容易に判讀できる文字がある。常盤大定・關野貞『中國文化史蹟』（一九七六年、法藏館）第五卷の「法王寺」の條に、「高山寺<sup>②</sup>に於て、地中より發掘せる唐蕭和尚靈塔銘なる一碑……」とあることから、恐らくは、陸增祥が使用した拓本は、出土の際の泥土が完全には除去できていない碑面から拓されたものではなかったかと推測される。

次に、筆者が現在の碑面から翻字し、更に『八瓊室金石補正續編』に著録された本文などによつて補訂した塔銘の本文を掲げる。なお右の碑側に刻された王維の詩は、その詩題が現存する諸版本にみえるそれとは異なつてゐる。また、左の碑側に刻された和詩は、前述の通り作者不詳である。兩碑側の缺損した部分を補う資料が『文淵閣四庫全書』の中にも見當たらぬ。よつて兩碑側に關しては、現在の碑面か

ら翻字するに留まっている。

凡例

- ①算用数字は行敷を表し、／（斜線）は改行を示す。
- ②ゴシック體の文字は、現在の碑面から判讀できる文字を表す。明朝體の文字は『八瓊室金石補正續編』に著録される本文により補った文字である。それ以外の資料に據って補ったものについては一一注記する。

③『全唐文補編』では、「上」「大師」「和尚」などの直前におかれた空格が、全て省略されている。また、『八瓊室金石補正續編』に見える「□」（赤字）のうち、各行の行頭や末尾に幾つか見られる「□」が、碑陰の末行二十二行目を除いて全て省略されている。本稿では、空格や「□」が、復元や解釋に缺くべからざるものと考え、碑刻の状態に即してそのまま著録する。

【碑陽】

〔篆額〕蕭和尚靈塔銘

1唐故臨壇大德乘如<sup>①</sup>〈下闕〉／2〈空行〉／3大師號乘如。姓蕭。梁武帝六代<sup>②</sup>〈下闕〉／4皇朝太子洗馬。大師神龍年中。七<sup>③</sup>〈下闕〉／5以律藏爲生<sup>④</sup>□□□□□子□□□□□〈下闕〉／6學於<sup>⑤</sup>大照長老。人莫得而知<sup>⑥</sup>〈下闕〉／7故□□□□餒實甚。□身有□。時服<sup>⑦</sup>〈下闕〉／8門。居臨壇之首<sup>⑧</sup>卅八年。□□□□□〈下闕〉／9恩詔追赴上都。爲安國・西明兩寺。〈下闕〉／10代宗多可其奏。行年八十一。大曆□□□□〈下闕〉／11□□□□巳<sup>⑨</sup>夏六十有一。門人哀<sup>⑩</sup>〈下闕〉／12於高嶽寺中塔之西。兄日時和□□〈下闕〉／13矣。數日。大師捨我而<sup>⑪</sup>〈下闕〉／14乘律大師<sup>⑫</sup>深達<sup>⑬</sup>〈下闕〉／15法忍之資。大師<sup>⑭</sup>〈下闕〉

【碑陰】

「蕭和尚靈塔銘」の碑文について

〔隸額〕皇唐兩京故臨壇大德乘如和尚碑陰記<sup>⑮</sup>

1〈空行〉／2和尚法諱乘如俗姓<sup>⑯</sup>〈下闕〉／3度於東都崇光寺。勤求佛事<sup>⑰</sup>〈下闕〉／4殊勝之域。世問心地於<sup>⑱</sup>寂公。虛<sup>⑲</sup>〈下闕〉／5玄宗以其行密道高。特<sup>⑳</sup>詔爲臨壇大<sup>㉑</sup>〈下闕〉／6歸。會冤憎者解<sup>㉒</sup>釋憾。嘗以念佛功德。爲<sup>㉓</sup>〈下闕〉／7坐或行。耳無驢聽非天淺深。善誘悅可。眾<sup>㉔</sup>〈下闕〉／8以弘教。雖委身險艱。竭己衣食。皆不之倦<sup>㉕</sup>〈下闕〉／9和尚振錫箕穎。南登江漢。因依而行。獲全忠<sup>㉖</sup>〈下闕〉／10肅宗即位之明年也。聞而嘉之。徵還長安。親<sup>㉗</sup>〈下闕〉／11立與<sup>㉘</sup>隨。趣定惠而得將捨對。上益稱歎。〈下闕〉／12代宗御極。禮有加焉。於對敷之時。納付囑之<sup>㉙</sup>〈下闕〉／13賴。尋以羸老。懇請閑居。優詔許之。遂宴<sup>㉚</sup>〈下闕〉／14弟子曰。法性無住。世相不留。緣報寄形。形盡<sup>㉛</sup>〈下闕〉／15赴。哀靈京師。佛日以之昏羅。禪林以之摧折。〈下闕〉／16約曰。我居士。和尚之仁兄也。東山未旋<sup>㉜</sup>〈下闕〉／17和弱歲與<sup>㉝</sup>和尚常居中嶽。雖生滅之理<sup>㉞</sup>〈下闕〉／18護。起身塔於高丘。不忘本也。和尚昔與<sup>㉟</sup>〈下闕〉／19之遊。而數公蘊崇德馨。迭居台輔。莫不隨其<sup>㊱</sup>〈下闕〉／20堂□□□□上乘。如何一朝。空墓遺<sup>㊲</sup>□□□□<sup>㊳</sup>〈下闕〉21建中元年龍集庚申仲秋<sup>㊴</sup>〈下闕〉

右：王維詩

1 如和尚與賢兄□□〈下闕〉／2 嘗下山。僕竊慕焉。寄<sup>㊵</sup>〈下闕〉／3 無着天親弟與兄。高丘蘭<sup>㊶</sup>〈下闕〉／4 林落葉聲。迸水定覺香案<sup>㊷</sup>〈下闕〉／5 有。儼然天竺古先生。〈下空〉

左：和詩

1 同王右丞寄蕭和<sup>㊸</sup>〈下闕〉／2 如公錫杖倚三車。居<sup>㊹</sup>〈下闕〉／3 夢。高居翠壁枕朝<sup>㊺</sup>〈下闕〉／4 出家。惠遠惠時<sup>㊻</sup>〈下闕〉

## 五 亡失した下截の發見と碑陰の復元

「蕭和尚靈塔銘」の上截部分に關して、現存する石刻と著録された文献の両面からの調査・検討を経て、以上のように碑文の復元を行った。ここで氣になるのは下截部分の行方である。實地調査では、嵩嶽寺内には下截部分は存在しないようであった。

斷裂して離ればなれになった下截部分が、殘碑として文献上に著録されていないか搜索したところ、それかと疑われる石刻を、『八瓊室金石補正』に發見することができた。眞に「靈塔銘」の下截部分であるのかどうか、以下検討を加えていきたい。

まず、搜索と検討に必要と思われる乘如禪師に關する重要事項について列挙したい。なお、本文内容の検討は本稿後半で行う。「靈塔銘」の記述から、乘如禪師は①俗姓が蕭（碑陽第三行）で、②玄宗により臨壇大德に命ぜられ（碑陰第五行）、③大曆年間（八十一歳で示寂し、法夏（比丘になつてからの年數）が六十一年（碑陽第十、第十一行）であった。また、『大宋高僧傳』の乘如傳の記述から、④晩年に安國寺の上座であつた、と知れる。

さて、『八瓊室金石補正』卷六十五に、履歴が蕭和尚と酷似した僧の事跡を伝える、一石碑の本文が著録されている。それは「安國寺僧殘碑」というこれまた殘碑であり、「蕭和尚靈塔銘」とは逆に、上半分が亡失した半截碑である。この殘碑は、嵩山太室南麓の會善寺にあつたとされるが、現在の所在は不明。この碑には僧の名が見えないが、大曆十三年に八十一歳で示寂し、法夏が六十一であつた安國寺の僧の事績を傳えている。ここで注目すべきは、碑文に房瑄や王維の弟王縉の名が見えることで、この「安國寺僧」は高級官僚と交流のあつた高

僧であると考えられる。

乘如禪師と活躍時期が一致し、没年齢および法夏が同じであり、安國寺上座という地位も同じ。さて、これほど共通点の多い二人の僧がいたとは、極めて考えにくいのではあるまいか。「八瓊室金石補正」では、「安國寺僧殘碑」について次のように解説している。

右碑在會善寺。僅存下截。十六行。復裂爲三。且多殘損。以文義綴屬之、可讀者如此。和尚居安國寺、卒於大曆十三年。權厝於山北寺、至建中□（似是元字）、遷窆乃立是碑也。

（右の碑は會善寺に在り。僅かに下截を存す。十六行なり。復た裂けて三つと爲る。且つ殘損多し。文義を以て之を綴屬し、讀むべき者は此のごとし。和尚 安國寺に居し、大曆十三年に卒す。山北の寺に權厝し、建中□（似是元字）年に至り、遷窆して乃ち是の碑を立つるなり。）（〈内は雙行注〉）

「建中□年」の「□」が「元」であるとすれば、建碑の年まで同じということになる。

では、「安國寺僧殘碑」は「蕭和尚靈塔銘」の下截部分なのであるうか。ここで一つ疑問が生まれる。それは、雙方の碑文の行數が異なつており、果たして本来一つの石碑であつたのかという疑問である。

「安國寺僧殘碑」は今引用した『八瓊室金石補正』の説明にもある通り十六行である。一方、「塔銘」の碑陽は十五行であり、碑陰の下截部分とするには一行多い。また「靈塔銘」の碑陰は二十一行であり、碑陰の下截部分とするには行數が餘りに少なすぎることになる。

しかし、次のことを考慮する必要がある。まず、『金石錄』には「蕭和尚靈塔銘」について「姓名殘缺」とあり、撰文者の姓名が刻されていた碑陽右下方が大きく缺けていたことが想像される。「碑陰記」

の撰文者名は、末行第二十一行「建中元年龍集庚申仲秋」の下方にあつたものと考えられるが、これは碑陽の右下方の端のちょうど裏側に當たる。また、碑陽の上載部分の第二行が空行になっていることから、その下載部分に、碑陽の撰文者名が刻されていたと考えられる。よって、その欠けは浅いものではなく、碑側から少なくとも二行分を越える幅で、碑陽碑側の両側とも亡失していたものと推測される。靈塔の側に建てられている石碑の下方が、大きく缺けて亡失するというのは、やや不自然である。恐らくは、『金石錄』の編者である趙明誠の生きた北宋期までに、靈塔が崩壊していたものと思われる。靈塔自體の崩落の巻添えを食って、側に建てられていたこの石碑も倒れ、上下に斷裂する憂き目にあつたのであろう。

現在の「蕭和尚靈塔銘」の現状は、その下方が左右に抉れた形になっており、亡失した下半分も、左右が本來の形をとどめてはいないであろうことを想像せしめる。離ればなれになった下載部分は、上載部分より幅が狭くなつていて當然であろう。となると、假に「安國寺僧殘碑」が「蕭和尚靈塔銘」の碑陰の下載部分であるならば、その行數が、上載部分より五行少ない十六行であっても、全く問題ないことになる。「八瓊室金石補正」の「安國寺僧殘碑」についての「裂けて三つと爲る」という記載も、粉々になつて亡失した部分が存在する可能性も示唆していよう。包丁で豆腐を切つたように、石碑が綺麗に三つに割れるということは、考えにくいからである。

「安國寺僧殘碑」が「塔銘」の下載部分であるか否かは、ひとまず措くとして、この三石を復元してみたい。「八瓊室金石補正」は三石の文章を文意が通るように繋ぎ合わせているが、その繋ぎ合わせ方に疑問が残る。そこで、その文章を本來の三石に一旦もどしてから、復

「蕭和尚靈塔銘」の碑文について

元を試みた。復元後、陸心源『唐文續拾』卷十三に著録されている「會善寺時居士殘碑」が、他ならぬ「安國寺僧殘碑」の第三石であることに気づいた。陸心源が著録に用いた拓本は、陸增祥が用いたものよりも古いようで、判讀できた文字の數が『八瓊室金石補正』に見える本文よりやや多い。よって、「安國寺僧殘碑」の第三石に關しては、『唐文續拾』の本文によつて補うことができた。ただ遺憾なことに、第一石・第二石に相當する碑文が全く著録されていない。

復元した「安國寺僧殘碑」の本文を次に掲げる。なお、清朝の避諱は全て元の文字に改めた。算用數字は行數を表す。

1 上闕 德且統釋門等濟眾 下闕 2 上闕 擊蒙因緣易簡 願故若男若 下闕 3 上闕 孰能化人成俗 至於奉前佛以 下闕 4 上闕 天寶末 羯胡 飲馬洛川 悉索閩人脅從爲 下闕 5 上闕 義智 是不一姓時 下空 6 上闕 同其道和尚啓說三之奧旨 會不二之妙門 宣經 下闕 7 上闕 因留內道場安置 及 下空 8 上闕 佛教有因循舛駁者 咸得奏請以革之正法 載行曠劫繫 9 上闕 安國寺 大曆十三年三月三日 示有 微疾沐浴趺坐 謂門 10 上闕 而言享年九九之數 僧臘六十有一 道俗奔 11 上闕 患詞畢恬 中闕 門人等 號泣 窮戀靡極 乃相 12 上闕 有姪樸陽縣主簿曰 下闕 13 上闕 塔廟之儀 孰敢專達 遂權厝於山北寺 將有俟焉 居士名時 14 上闕 已齊友愛之心猶切 以建中 元 年正月十七日 自山北寺遷 15 上闕 清河房公瑄 博陵崔公渙 太原王公縉 弘農楊公綰 爲支許 16 上闕 淨歎我 殊挹定水之 中闕 峻極者矣 良輔昇 17 上闕 さて、この本文の各行の頭を揃えて書いたものを「蕭和尚靈塔銘」の碑文と上下に合わせ、左右に移動しつつ繋ぎ合わせてみた。すると、

ピタリと文意が繋がるところが現われた。例を挙げると、「蕭和尚靈塔銘」碑陰の第五行行末「臨壇大」と、復元した「安國寺僧殘碑」の第一行行頭「德」が繋がり、「臨壇大德」となる。また「安國寺僧殘碑」第五行行末「時（時に）」から、碑陰第十行行頭の「肅宗即位之明年也」へ繋がる。こう繋げてみると、「時」字の下方が全て空白であるのは、續く「肅宗」二字を次行へ擡頭するためであったと合點がゆく。更に、「安國寺僧殘碑」第九行行末の「謂門」から碑陰の第十三行行頭「弟子曰」へと繋がり、「謂門弟子曰（門弟子に謂ひて曰はく）」となる。なお、文章が行を越えてスムーズに繋がる行の文字數から考えて、碑陰は行四十字であったと思われる。

さてこうしてみると、『八瓊室金石補正』卷六十五に著録される「安國寺僧殘碑」は、「蕭和尚靈塔銘」碑陰の亡失した下截部分であり、兩者は本來一つの石刻であったと斷ずることができよう。

## 六 碑文に見る乘如禪師の事績

次に本文の内容を具體的に見ていきたい（復元圖A・B参照）。

### (一) 禪師の出自

碑陽第三行に「大師 號は乘如、姓は蕭。梁の武帝六代の……」とある。「梁の武帝」以下の部分は、禪師の出自について述べているものと思われる。禪師は梁の武帝・蕭衍六代の孫にあたるのであろう。『大宋高僧傳』卷十五の乘如傳には「釋乘如、未だ氏族を詳かにせず」とあるが、武帝の流れを汲む名門蕭氏の出身であったことが、この碑文からわかる。同じく碑陽の第四行に「皇朝太子洗馬。大師、神龍年中……」とある。「大師」以下が禪師自身の事績について記されているものとすると、その前の「皇朝太子洗馬」は禪師の父ないしは祖父

が、太子洗馬の官にあったことを示していると思われる。禪師の父祖を探る手がかりは、①禪師が武帝の六代の孫であり、②近い先祖に太子洗馬の官に至った人物がいる、という事實である。ところで、唐代の蕭氏一族には、四人の娘を出家させた崇佛家の蕭瑀がいる。瑀の長女・法樂の墓誌銘「大唐濟度寺故比丘尼法樂法師墓誌銘」には、「梁武皇帝之五代孫」とある。となると、禪師は六代の孫であるから、蕭瑀の孫の世代に並ぶ蕭氏一族となる可能性が考えられよう。

顯慶五年に卒した蕭愼の墓誌銘である「大唐故上護軍朝議郎行邛州蒲江縣令蕭府君墓誌銘并序」に、「蘭陵郡蘭陵縣人也。迺祖梁高祖武皇帝……父武定侯、太子洗馬」とある。趙超『新唐書宰相世系表集校』（中華書局、一九九八年）卷一では、この「武定侯」を蕭岑の子の瓚・瑀のいずれかであるとす。瓚・瑀兄弟は蕭瑀の從兄にあたる。この兄弟は、蕭瑀の崇佛思想が影響していて不思議ではない距離にある。禪師は武定侯の子であろうか。その世代が生きた具體的時代をはかる目安として、瑀の長女・法樂法師の卒年を見ると、咸亨三年（六九二）に七十四歳で示寂している。一族の同世代中、排行が一の者と數十の者とは年齢差が極めて大きい、それを考慮に入れても、法樂法師と乘如禪師では年代が開きすぎている。次に、武定侯の孫であったと假定してみると、禪師は瑀の子・鉞の子供の世代に屬する人物となる。その世代で武定侯の血筋を辿ると、蕭岑の曾孫にあたる令臣が久視元年（七〇〇）に五十六歳で卒している。これでもまだ禪師の生きた時代との開きが大きい。となると、太子洗馬であった禪師の父祖は、武定侯（瓚・瑀のいずれか）であった可能性は低いと言えよう。『唐代墓誌彙編』『唐代墓誌彙編』『石刻史料匯編』では、乘如禪師の父祖の時代に合致する、太子洗馬に終わった蕭氏の存在は確認できな

い。よって禪師の父祖については未詳である。

次に禪師の生年についてであるが、碑陰第十二行に「大曆十三年三月三日、微疾有るを以て沐浴臥坐し……」、第十三行に「享年九九之數」とあることから、遡って聖曆元年（六九八）の生まれとわかる。碑側の詩の作者・王維より一歳年長であったことになる（王維六九九年生説を採用した場合）。

碑陰第十六行に「我が居士は和尚の仁兄なり」とあり、王維の「過乘如禪師・蕭居士嵩丘蘭如」詩の蕭居士は、禪師の俗兄にあたることがわかる。碑陰第十七、十八行に「居士 名は時護。身塔を嵩丘に起て……」とあり、蕭居士の本名は蕭時護であったと知れる。一方、碑陽第十二行には「兄は時和と曰ひ……」とあることから、禪師の俗兄に蕭時和という人物がいたこともわかる。二人の兄は「時」字を排行としており、禪師の俗名も「時」であったと考えられよう。

ところで、「蕭時和」というと「杜鵬舉傳」の作者の蕭時和を想起させられる。蕭時和は開元以後の人で處士<sup>⑧</sup>。その「杜鵬舉傳」は、杜鴻漸の父・鵬舉が冥界に遊んで睿宗の即位を豫知する話で、代宗朝の初めに書かれたものと言われる。作者蕭時和については不詳であるが、朝廷の内情に通じていた人物であったことは間違いないであろう。後述するように、乗如禪師は皇帝の歸依を受けた高僧であった。その乗如禪師から兄の時和は簡単に朝廷内の情報を得ることができたはずであり、「杜鵬舉傳」の著者の蕭時和と世代も一致している。よって、この二人が同一人物である可能性は高いと言えよう。

なお、碑陰第十七行に「和弱歲 和尚と中嶽に居す」とあり、前の第十六行の下方は缺けている。おそらく十六行末尾には「時」字が刻されていたと考えられ、「時和 弱歲……」となるものと推測される。

「蕭和尚靈塔銘」の碑文について

(2) 禪師の出家から示寂まで

碑陰第三行に「東都崇光寺に度す」とあり、洛陽の崇光寺で得度したものとと思われる。碑陰第五行に「玄宗 其の行密にして道高きを以て、特に詔して臨壇大(徳)と爲す」とあり、碑陽第八行に「臨壇の首にあること卅餘年」とあることから、玄宗の時代に臨壇大徳となり、四十餘年の長きに亘って教化につとめたようである。

碑陰第八、九行に「天寶の末、羯胡□□馬を洛川に飲ひ……和尚 錫を箕穎に振ひ、南のかた江漢に登る。……時に肅宗即位の明年なり。聞きて之を嘉し、長安に徵還す。……和尚 説三の奥旨を啓き、不二の妙門を會す」とある。至徳二載、安史の亂がまだ治まらぬ中、禪師は箕穎に巡錫して南へと移動し、肅宗から長安に召されて佛教の奥義を説いたのであろう。

碑陰第十二行に「代宗 極に御するに及び、禮の加ふる有り」、第十三行に「尋いで羸老を以て閑居を懇請するに、優詔 之を許す。遂に安國寺に宴す」とあるので、代宗朝に老齡を理由に閑居を願ひ出て、安國寺に宴坐したことがわかる。また「大曆十三年三月三日、微疾有るを示し、沐浴臥坐す。……享年九九之數。僧臘六十有一」とあり、大曆十三年三月に八十一歳で示寂したようである。

碑陰第十七、十八行に「山北の寺に權厝し、將に俟つ有らんとす。居士 名は時護。身塔を嵩丘に起て、本を忘れざるなり。建中元年正月十七日を以て山北の寺より之を遷し……」とあることから、禪師示寂後、山北の寺に假埋葬し、二年後の建中元年の春に骨函を掘り出し、高嶽寺の西に埋葬して靈塔を建てたものと思われる。

(3) 禪師と王維・王縉兄弟との交流

碑陽第六行に「大昭長老に學び」とあり、碑陰第三行に「寂公」と

あることから、乘如禪師は大照禪師普寂の教えを受けたものと推測される。王維が「乘如禪師・蕭居士を高丘蘭若に過る」という七律を作り、さらにその詩が塔銘の碑側に刻されているのは、王維と禪師の交流を證左するものであるが、その交流の發端は、雙方が普寂の弟子なしいしは信奉者であったことに據るのではないだろうか。王維の母である博陵縣君崔氏、そして王維の弟・王縉も普寂の俗弟子であった。王維自身も、母や弟と一緒に普寂の説法を聞いたことであろう。禪師は王縉とも親密であったようで、碑陰第十九行にその名が見える——「清河房公瑄・博陵崔公煥・太原王公縉・弘農楊公緒 支許を爲す」。「支許」とは支遁（高僧）と許詢（高士）が交際したことから、僧と文士の厚誼を讃える語。禪師は臨壇大徳という立場から、多くの高級官僚との交際があったものと思われる。

「河南府登封縣嵩嶽會善寺戒壇牒」（俗稱「代宗御書碑」）には、安國寺僧であった乘如禪師が大曆二年（七六七）十月に、東都白馬寺・敬愛寺などの僧七人を選んで戒壇を建てて戒律を講ずることを願ひ出したことが記されている。王縉らの奏上により赦許され、同年十一月には乘如が右銀臺門に至り、奉表陳謝したことも刻されている。王縉との深い繋がりを窺わせる一件であろう。

こうしてみると、北宗第二祖の普寂を中心とする、都長安と高山一帶の寺院を據點とした僧俗を交えた佛教グループに、乘如禪師も王維・王縉兄弟も屬していた。そして、互いに佛教を介した聖俗兩面の強い紐帯で結ばれていたものと思われる。「蕭和尚靈塔銘」や「代宗御書碑」に記されたことから、こう判断するのが自然であろう。

## 七 おわりに

「蕭和尚靈塔銘」と「安國寺僧殘碑」は、本来、一つの石刻であったと斷ずることができよう。「八瓊室金石補正」では安國寺僧殘碑の項に「金石錄自有蕭和尚塔銘（金石錄の目に蕭和尚塔銘有り）」とあるので、陸增祥は、建中元年に建てられた塔銘の存在について知っていたことがわかる。しかし、陸增祥は塔銘自體を見ておらず、塔銘の碑文の内容までは知らなかったようであり、そのため安國寺殘碑が蕭和尚靈塔銘の下載であるとは氣づくことはなかった。さらに、彼は、安國寺を長安の大安國寺ではなく、河南の安國寺であると誤認している。とまれ、蕭和尚靈塔銘は北宋期にはすでに斷裂し、いつの頃からか上截部分と下截部分が別々の場所に置かれたため、それぞれ別の殘碑として扱われ、著録もされず、忘れ去られていたものと考えられる。

今回、碑陰に關して亡失した下截を文獻上より搜索し、上下を組み合わせて出來うる限りの復元を試みた。その碑文の内容は、乘如禪師の事績のみならず、王維・王縉兄弟との親密なる交流を彷彿とさせるものがある。また、王維・王縉兄弟の個人的な佛教信仰はもとより、政治上の崇佛・護法活動さえも、普寂およびその門下の僧俗を含めたグループを基盤として行なわれていたことをも想像せしめるものがある。

加えて、右の碑側の王維詩は、刻された詩題が現存する諸版本のそれと異なっており、一方、左の碑側に見える作者不詳の和詩は、現存する版本の典籍には見えないことも注目される。寫本から版本へと移行する唐宋間の本文變化をも示唆する唐詩唐刻の重要資料と言えよう。さらに餘祿として、禪師の兄が、「杜鵬舉傳」の作者の蕭時和である



可能性を示唆する部分をも見いだすことができた。いずれにせよ、この「蕭和尚靈塔銘」の持つ意義は大きいと言わざるを得ない。

注

※なお、注では『八瓊室金石補正』を『補正』、『八瓊室金石補正續編』を『補正續編』とそれぞれ略記する。

(1) 施塾存『北山集古録』(巴蜀書社、一九八九年)に、一九八二年當時、この塔銘は高陽書院の庭に置かれていて、參觀者の椅子がわりに使われていたとある。それが碑陽の摩滅の原因であろう。この碑石に頽うた人々は、中央部第五、第八行の下方邊りに腰を下ろしたものと思われる。

(2) 注(1)所掲の『北山集古録』及び王雪寶主編『高山・少林寺碑刻選』(中國廣播電視出版社、一九九一年)。

(3) 『補正』の章鈺の序に「凡此編未收、與凡新出諸刻、公子汝寧太守蔚庭年丈、仰續先業、有續補正稿本。鈺亦幸得讀之(凡そ此の編に未だ收めざると、凡そ新出の諸刻と、公子の汝寧太守 蔚庭年丈、先業を仰續し、續補正の稿本有り。鈺も亦た幸いに之を讀むを得たり。)」とある。『續修四庫全書』に收められるまでは、寔に稀覯なるテキストであったことがわかる。

(4) 同書では、「嵩嶽寺」とすべきところを「高山寺」と誤植している箇所が他にもある。

(5) 陳尙君編『全唐文補編』では、第一行の「乗如」以下を『金石錄』卷八、『寶刻叢刊』卷二十にある石碑題名の記載によって「和尚靈塔銘」の五字を補っている。「乗如」以下に「和尚靈塔銘」が刻されていたものと思われる。だが、「靈深禪師灰身塔銘」(貞觀三年)の第一行が「慈潤寺靈深禪師灰身塔銘文」となっているように、さらに「文」字が加え

「蕭和尚靈塔銘」の碑文について

られていた可能性もある。また、「侯莫陳大師壽塔銘」(開元二年)の第一行の「六度寺侯莫陳大師壽塔銘文 并序」のように、更に「并序」二字が付加されていた可能性もあろう。

(6) 『補正續編』では「□」に作る。しかし、現在の碑面から「於」と判讀できるので、「於」字を補う。

(7) 『補正續編』では「大□長老」に作る。『補正續編』にある通り、碑面には「學於 大□長老」と、「於」字と「大」字の間に二分の空格があり、「大□長老」が尊敬すべき對象であることを表している。一方、碑陰に「世間心地於 寂」とあり、「寂」字の上に二字の空格が見られる。「寂」は寂和尚即ち大照禪師普寂を表しているよう。このことから、碑陽の「大□長老」は大照禪師を指すものと考えられる。よって「□」部分に「照」字を補った。なお、『全唐文補編』では「大□長老。……」と句讀を付しているが、誤りであろう。

(8) 『補正續編』では「莫」の異體字「算」に作る。『全唐文補編』ではこの異體字を誤讀して「算」に作る。

(9) 『補正續編』では「□」に作る。注(1)所掲の『北山集古録』の「蕭和尚靈塔銘」の概説では「首」に作る。この文字は、現在の碑面からも「首」と判讀できる。

(10) 『北山集古録』では、「八」を「餘」に作る。

(11) 『補正續編』では「□」に作る。しかし、現在の碑面から「爲」と判讀できるので、「爲」字を補う。

(12) 『補正續編』では「□」に作る。『大宋高僧傳』乘如傳に「西明・安國二寺上座」とあり、「國」字が刻されていたものと考えられるので、ここでは「國」字を補う。

(13) 『全唐文補編』では、この「兩」字を脱している。

(14) 『補正續編』では「□」に作る。現在の碑面から「深」と判讀できるので「深」字を補う。

- (15) 『全唐文補編』では、「皇唐兩京故臨壇大德乘如和尚碑陰記」の本文の典拠を『補正續編』の卷二〇とするが、卷三二の誤りである。
- (16) 現在の碑面からは、「光」字とも「先」字とも辨別し難いが、ひとまず『八瓊室金石補正續編』の「光」に作るに従う。
- (17) 現在の碑面を見るに、「以」字かとも疑われるが、俄に断定できないため、ひとまず『補正續編』の「□」に作るに従う。
- (18) 『全唐文補編』では「當」に誤る。
- (19) 『補正續編』では「夫」に作る。しかし現在の碑面を見るに、「天」であると思われる。「天」の上の碑面に傷が見られ、それが拓本では「天」字と繋がって見える可能性が考えられる。陸氏は拓本の石花を實線と捉えて「夫」としたのではないかと思われる。
- (20) 『補正續編』では「□」に作る。しかし現在の碑面から「之」と判讀できるので、「之」字を補う。
- (21) 『補正續編』では「□」に作る。しかし、現在の碑面から「獲」と判讀できるので、「獲」字を補う。
- (22) 『全唐文補編』では、この「得」字を脱している。
- (23) 『補正續編』では「□□」とし、『全唐文補編』では「□」とする。現在の碑面は、漫漶となっている文字が一字のみ。その文字の一部分(左角)も石が缺けており、それより下方は完全に亡失している。陸増祥の使用した拓本の採拓時から現在までの間に、石碑の移動に際して、石碑下邊部が少々破損した可能性が考えられる。よって、ここでは缺字二字分とする。
- (24) 『補正續編』では「秋」に作る。『北山集古錄』も概説において「庚申仲秋」としている。ところが『金石錄』では「塔銘」の年月を「德宗建中元年二月」としている。それならば、「春」に作るべきであるが、ここではひとまず「秋」に作るべく。
- (25) 碑面には旁の「寺」のみ残り、偏の部分は脱落している。直前に「惠遠惠」とあり、禪師と蕭居士兄弟を慧遠・慧時兄弟に譬えているものと思われる。よって「時」字を補う。
- (26) 『大宋高僧傳』卷十五の「唐京兆安國寺乘如傳」に「終西明・安國上座(西明・安國の上座に終る)」とある。
- (27) 復元後、『補正』の繋ぎ合わせに一部誤りのあることが判明した。注(32)および注(33)参照。
- (28) 『金石補正』にこの「若」字無し。今、『唐文續拾』により補う。
- (29) 『金石補正』では「索」を「□」に作る。今、『唐文續拾』により補う。
- (30) 『金石補正』では「宣」を「□」に作る。今、『唐文續拾』により補う。
- (31) 『金石補正』にこの「□」無し。ひとまず『唐文續拾』に従う。
- (32) 『金石補正』では「謂門」の次に、誤って「惠詞畢恬」四字を繋げている。
- (33) 『金石補正』では「道俗奔」の次に、この「惠詞畢恬」四字ではなく、誤って「有姪爍陽縣主簿曰」八字を繋げている。
- (34) 『金石補正』では「號泣」を「□□」に作る。今、『唐文續拾』により補う。
- (35) 『金石補正』では「岡」に作る。『唐文續拾』に「岡」に作る。碑面では同義の別字「岡」となっていたものと思われる。陸増祥は碑面の書體を尊重して「岡」のまま著録し、一方、陸心源は通行の「岡」にしたものと思われる。今、『唐文續拾』に倣う。
- (36) 『唐文續拾』では「聞」に作る。文義より『金石補正』の「聞」に作るに従う。
- (37) 『唐文續拾』では「慈」に作る。文義より『金石補正』の「戀」に作るに従う。
- (38) 『金石補正』では「及」に作る。文義より『唐文續拾』の「極」に作るに従う。
- (39) 周祖譔『中國文學家大事典 唐五代卷』(中華書局、一九九二年)

(40) 李時人『全唐五代小説』第一冊(陝西人民出版社、一九九八年)

(41) 『金石補正』で陸增祥は「河南通志、安國寺在河南府治。南唐咸通間建。據碑、則代宗時已有是寺。(河南通志、安國寺は河南府治に在り。南唐の咸通間に建てり。碑に據れば則ち代宗の時、已に是の寺有り」と記している。

(42) 本稿を書き終えてから、『唐文續拾』卷十三に「會善寺殘碑」なる石刻が著録されていることに気づいた。その碑文は、乘如禪師と同じく安國寺で示寂し、建中元年二月に葬られた僧について記されている。行數は全九行で、「蕭和尚靈塔銘」の碑陽が十五行であるのと全く異なる。しかし、本稿の復元作業において判明したように、碑陰に關しては、上截が二十一行であるのに對し下截が十六行であり、斷裂の際の損傷により五行少なかった。よって、「會善寺殘碑」が「蕭和尚靈塔銘」の碑陽の下截である可能性は高い。碑陽に關しては、改めて検討を加えてみたいと考えている。

〔付記〕 本稿は、二〇〇五年十月八日、北海道大學で開催された日本中國學會第五十七回大會における口頭發表をもとに加筆訂正したものであります。實地調査・口頭發表・論文執筆に際して、數多くの先生方からご教示を賜りました。ここに鳴謝申しあげます。

### 復元圖(A~C)

※碑面を容易に想像できるように行頭を揃え、句讀を省略して掲げた。各行頭の算用數字は行數を表す。

### 復元圖 A 碑陽 蕭和尚靈塔銘

### 〔篆額〕 蕭和尚靈塔銘

「蕭和尚靈塔銘」の碑文について

1 唐故臨壇大德乘如(下闕)

2 (空行)

3 大師號乘如姓蕭梁武帝六代(下闕)

4 皇朝太子洗馬大師神龍年中七(下闕)

5 以律藏爲生(下闕)子(下闕)

6 學於 大照長老人莫得而知(下闕)

7 故(下闕)餒實甚(下闕)身有(下闕)時服(下闕)

8 門居臨壇之首冊八年(下闕)

9 恩詔追赴上都(下闕)安國西明兩寺(下闕)

10 代宗多可其奏行年八十一大曆(下闕)

11 (下闕)夏六十有一門人哀(下闕)

12 於嵩嶽寺中塔之西兄日時和(下闕)

13 矣歎曰大師捨我而(下闕)

14 乘律大師 深達(下闕)

15 法忍之資 大師(下闕)

### 復元圖 B 碑陰

(蕭和尚靈塔銘)碑陰(皇唐南京故臨壇大德乘如和尙碑陰記)の上截部分と「安國寺僧殘碑」(本來は靈塔銘の下截部分)を合體復元したものを以下に掲げる。なお本文で指摘したように、碑陰は本來、行四十字であったと考えられる。よってその點から缺字の數が判斷できる箇所には□□の記號を缺字の數だけ補った。

〔隸額〕皇唐兩京故臨壇大德乘如和尚碑陰記

1 (空行)

2 和尚法諱乘如俗姓(下闕)

3 度於東都崇光寺勤求佛事(下闕)

4 殊勝之域世問心地於 寂公虛(下闕)

5 玄宗以其行密道高特 詔爲臨壇大德且統釋門等濟眾(下闕)

6 歸會冤憎者解以釋憾嘗以念佛功德爲擊蒙因緣易簡願故若男若(下闕)

7 坐或行耳無輟聽非天淺深善誘悅可厭孰能化人成俗至於奉前佛以(下闕)

8 以弘教雖委身險艱竭己衣食皆不之倦天寶末羯胡飲馬洛川悉索聞人脅從爲

9 和尚振錫箕穎南登江漢因依而行獲全忠義智是不一姓時(下空)

10 肅宗即位之明年也聞而嘉之徵還長安親同其道 和尚啓說三之奧旨會不二之妙門詮經(下闕)

11 立與隨趣定惠而得將捨對 上益稱歎因留內道場安置及(下空)

12 代宗御極禮有加焉於對之時納付囑之佛教有因循舛駁者咸得奏請以革之正法載行曠劫繫

13 賴尋以羸老懇請閑居優 詔許之遂宴安國寺大曆十三年三月三日示有微疾沐浴跌坐謂門

14 弟子曰法性無住世相不留緣報寄形形盡而言享年九九之數僧臘六十有一同俗奔

15 赴哀震京師佛日以之昏羸禪林以之摧折詞畢恬門人等號泣罔聞窮戀靡極乃相

16 約曰我居士 和尚之仁兄也東山未旋(中闕)有姪櫟陽縣主簿曰(下闕)

17 和弱歲與 和尚常居中嶽雖生滅之理塔廟之儀孰敢專達遂權厝於山北寺將有俟焉居士名時

18 護起身塔於嵩丘不忘本也 和尚昔與已齊友愛之心猶切以建中元年正月十七日自山北寺遷

19 之遊而數公蓋崇德馨迭居臺輔莫不隨其清河房公瑄博陵崔公渙太原王公縉弘農楊公綰爲支許

20 堂上乘如何一朝空慕遺(中闕?)淨歎我殊挹定水之(中闕?)之峻極者矣良輔昇(下闕)

21 建中元年龍集庚申仲秋(下闕)

復元圖C

碑側 右：王維詩

(左行で刻されている。なお、この詩の本文は、宋本二種においても文字の異同があるので、脱落部分を版本上の文字で補うことはしない。)

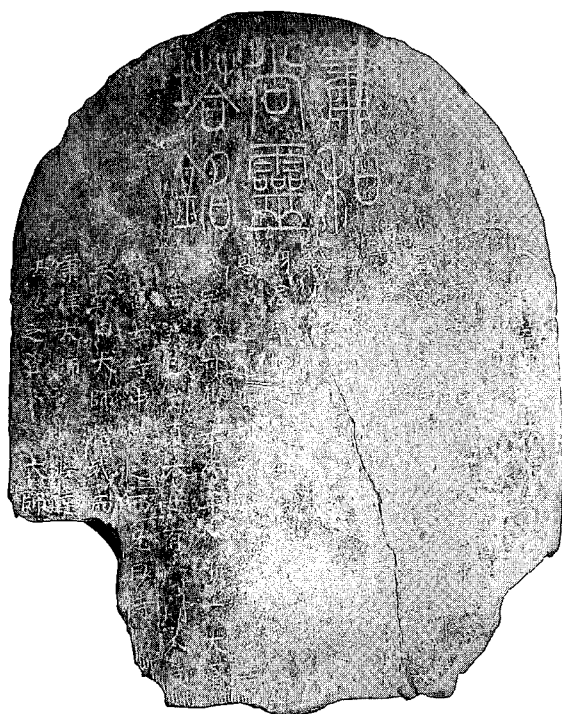
- 5 有儼然天竺古先生 〔下空〕
- 4 林落葉聲迸水定侵香案 〔下十四字闕〕
- 3 無着天親弟與兄嵩丘蘭 〔下十四字闕〕
- 2 嘗下山僕竊慕焉寄 〔下闕〕
- 1 如和尚與賢兄 〔下闕〕

碑側 左：作者不詳 和詩

(闕字の字數は殘存部分の韻字の位置から推定した。)

- 1 同王右丞寄蕭和 〔下闕〕
- 2 如公錫杖倚三車居 〔下闕十二字〕
- 3 夢高居翠壁枕朝 〔下闕十三字〕
- 4 出家惠遠惠時 〔下闕十字〕

碑陽「蕭和尚靈塔銘」



碑陰「皇唐兩京故臨壇大德乘如和尚碑陰記」



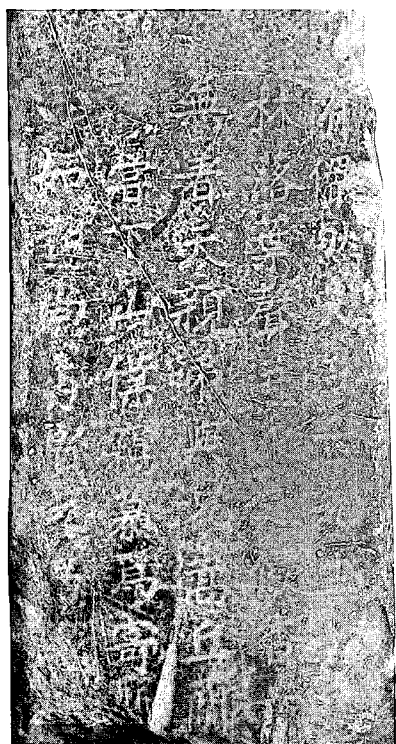
右斜めより碑陽と碑側（右）を見る



碑側(右) 王維詩



碑側(左) 作者不詳 和詩



「蕭和尚靈塔銘」の碑文について